
酒と悪魔

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酒と悪魔

【Nコード】

N3239R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

悪魔達が人間を墮落させる為には酒が一番いいと言った。どの酒が墮落させるのに一番いいかというと。芥川龍之介の『煙草と悪魔』という作品からヒントを得ました。作者は煙草は駄目なのでこちらになりました。

第一章

酒と悪魔

魔界でだ。悪魔達が話をしていた。黒い身体に蝙蝠の翼、高く曲がった鼻に険のある目、頭に曲がった角、先が三角になった尻尾とまさに悪魔の姿である。彼等はテーブルに座って話をしていた。

「人間だな」

「ああ、奴等だな」

「あの連中だよ」

彼等は人間について話をしていった。

「あの連中をどうして墮落させるか」

「それが問題だよな」

「何が一番墮落させやすい？」

「異性か？それとも金か？」

「権力か？」

「何が一番だ？」

話すのはこのことだった。何が人間を一番墮落させるか。そのことを話しているのだった。

「本当にな」

「何がいいかだよな」

「問題はそれだが」

「煙草はどうだ？」

ここで一人が言った。

「あれはどうだ」

「ああ、あれはやった奴がいたぞ」

「何か妙な感じになって終わったからな」

「止めた方がいいぞ」

「それはな」

「そうか。じゃあ止めるか」

煙草は止めになった。それでさらに話していく。

「金もな」

「オーソドックスだな」

「今一つ面白くないな」

「ああ、権力もな」

「これまでやってわかってるしな」

「今日一つ面白くないぞ」

彼等は楽しみや喜びを求めているのだ。金や権力についても既にやっていてどうなるかわかっていた。それでこう言い合っただった。

「飽きたな」

「ああ、何時の時代でもどうなるかは同じだしな」

「それにこっちの世界もな」

魔界の話にもなるのだった。彼等の世界だ。

「普通に金と権力で人間の世界と同じになってるしな」

「魔王様達もそれぞれ権力闘争と蓄財に余念がないしな」

「俺達だってそうだしな」

「ああ、だから同じだろ」

こっち話がされてだった。この二つも止めになった。そしてさらに話をしていく。次はだ。

「女、それが男な」

「同性愛もいいな」

「これはどうだ？」

「墮落させるのに一番か？」

「いや、そうとも限らないぞ」

これも否定されるのだった。

「愛に目覚めてそこから猛烈に頑張る奴も多いしな」

「ああ、愛こそ全てとか言ってるな」

「墮落どころか正義とかに目覚めてな」

「実に酷いことになるしな」

彼等から見ればそうなのだった。悪魔だからだ。

「これも駄目だな」

「ああ、駄目だ」

「同性愛でもな」

「それでもそつちに目覚める奴いるからな」

同性愛でもだ。愛は愛だからだ。

「愛情ってやつは人間の感情の中で一番面倒だからな」

「これは一番駄目だな」

「かえってよくないからな」

「却下だな」

「ああ、そうしような」

これで愛情も駄目になった。しかしであった。

彼等も諦めない。次に出すものは。一人が言った。

「酒はどうだ？」

「酒か？」

「酒のことか」

「そつだ、酒だ」

これが出て来たのだった。

第二章

「酒はどうだろうな」

「ああ、あれな」

「あれで喧嘩はじめる奴もいるしな」

「人間性変わる奴いるしな」

「特に下品になる奴は最高だな」

「酒になるとだ。彼等の話も弾む。」

「あれにするか？」

「それじゃあな」

「かなり効果があるな」

「よし、それじゃあそれにするか」

「酒をもっともつと人間の世界に広めてな」

「人間達を墮落させるか」

「ああ、そうしような」

こうして彼等の話は決まった。人間達を酒で墮落させることにしたのであった。決めたらそれで即座に動く彼等だった。

まずはだ。彼等は酒を集めた。そうして車座になってそれぞれ話す。

「それじゃあな」

「ああ、酒を広めるにしてもな」

「どの酒がいいかな」

「酒っていつても色々だからな」

「こう話すのであった。」

「具体的にどの酒だ？」

「ええと、これは米で作った酒か」

「ああ、日本の酒だ」

「あの島国の酒か」

「日本酒だな」

まずはこの酒が目に入ったのである。

「とりあえずどの酒がいいか確かめるか」

「人間を墮落させるにはどの酒が一番いいか」

「飲んで確かめるぞ」

「まずはこの米の酒からな」

こうしてだった。その酒を皆でカップに入れて飲んでみる。するとだった。

「甘い酒だな」

「ああ、後に結構残るな」

「しかしアルコールはあまり強くないな」

「甘いから飲み過ぎたら糖尿病になりそうだがな」

「一応考えておくか」

「そうだな」

そしてだった。次は。

「コーリヤンで作った酒か」

「老酒か」

「おお、これは中々」

「アルコール強いな」

「いい感じじゃないのか？」

「中国の酒か」

この酒についても飲みながら話されていく。

「これもいいか？」

「候補として置くか」

「そうだな」

「で、今度はあの派手な国の酒か」

「トウモロコシの酒だな」

「アメリカか」

「バーボンだな」

次はこの酒だった。飲んでみるとだ。

「何かいがいがした感触だな」

「これもいいな」

「そうだよな」

「アルコールも強いし何か面白い感じだな」

「で、次はサボテンで作ったな」

「テキーラだな」

「メキシコだったな」

それも飲んでみる。これもまた、だった。

「アルコールが強いとそれだけ酒が回るからな」

「これもよさげだな」

「いや、アルコールだったらこれだろ」

透明の酒が出て来た。それは。

「ロシアの酒だ」

「ウオツカか」

「それか」

「それ飲むか」

「ああ、これは凄いぞ」

こんな話をしてそうして酒を飲む。するとであった。

第三章

「いいねえ」

「この強さな」

「これは飲んだら一発で酔えるな」

「ああ、人間の世界にはこれを一番広めるか？」

「そうするか？」

話が決まりかけてきた。

「ウオツカを人間界にこれでもかと思めてな」

「どんどん飲ませて墮落させる」

「そうするか」

「これはな」

「ああ、そうするか」

こう話してだった。ウオツカになろうとしていた。しかしであった。ここで悪魔の一人がこんなことを言ってきたのであった。

「いや、待て」

「んっ、どうした？」

「何かあったのか？」

「他のものも試してみないか」

こう仲間達に提案するのだった。

「ここはだ」

「他の酒もか」

「ウオツカ以外にもか」

「そうだ、何もアルコールが強ければいいものではない」

彼の主張はここに根拠があった。

「要は人間を墮落させることだな」

「うむ、そうだ」

「その通りだ」

「ならだ。ここはだ」

どうかというのだった。

「多く飲ませることもいいのではないのか」

「多くの酒を飲ませてか」

「そうして墮落させる」

「そうだな、言われてみればな」

「それがいいな」

彼等もそれを聞いてだ。一理あると考えた。そうしてだった。

祖の言葉を受けてだった。実際に他の酒も確かめてみることにしたのだった。ウオツカに決めかけたがそれを一端止めてだった。

それで今度確かめた酒は。

「ああ、これはよく飲むな」

「そうだな」

「いつもな」

「我々も飲むな」

ワインだった。赤もあれば白もある。ロゼもだった。

「昔から飲んでいる酒だ」

「何でもあのいやらしい神の血らしいがな」

「いや、あの忌まわしい主のものではなかったか」

「むっ、そうだったか」

この辺りの記憶はあやふやなところのある彼等だった。

しかしとりあえずだった。ワインは飲んでそれで確かめることにしたのだった。

それぞれのグラスに入れて飲んでみる。その感じは。

「うっむ、これもいいな」

「相変わらずの飲みやすさ」

「美味い」

「次から次にいけるぞ」

「幾らでもな」

「これもいいのではないか？」

そしてワインもまた候補にあがった。

第四章

「これを人間界により広めればな」

「いい感じ墮落してくれるか」

「うむ、ワインの方がウオッカよりもいいか」

「それにだ」

「ここだ。ワインにまつわるこのことも話された。

「ワインはどの国でも飲まれるしな」

「それに飲む者も多い」

「しかも飲む者を増やしやすい」

「飲みやすさ故であった。

「しかもどんなつまみでもいけるしな」

「ではこれにするか」

「ワインにするか」

「いや、待て」

「だがだった。ここでまた一人が言うのであった。

「そういうことならビールもいいのではないのか」

「あつ、それがあつたな」

「そうだったな、ビールだ」

「それもあつたぞ」

「悪魔達は今度はこの酒のことを思い出したのであった。

「あれもいいな」

「あれもどんどん飲めるしな」

「しかも人間のどの国でも飲んでいる」

「ビールもそうなのだった。

「つまみもな。あまり選ばないしな」

「おまけに酔い方も悪い」

「ではあれも確かめてみるか」

「うむ、そうしようぞ」

「そうだな」

こうしてビールも飲んでみるのだった。するとだ。

これもまたよかった。悪魔達は堪能した。とにかく鯨飲していく。そうしたこと続けていった。やがて。

「今度はウイスキーを確かめようぞ」

「そうだ、ラムはどうだ」

「コニヤックもいけるぞ」

「待て待て、沖縄の泡盛だ」

「焼酎もどうだ」

「ブランデーは」

こんな調子で酒を確かめ続ける。一通り飲んでそしてそれから。

「待て、バーボンはどうな味だった」

「老酒のことを忘れてしまったではないか」

「日本酒、見直してみるか」

「やはりウオッカにしないか」

また最初から飲むのであった。そうしたことを延々と繰り返した。つた。

何時しか彼等は酒ばかり飲んで過ごすようになってしまった。人を墮落させることなぞ忘れてしまった。飲みまくっていてだ。

そのまま飲み続けてばかりになった。酒に溺れてしまったのは誰なのか、それはもう言うまでもないことであった。皮肉なことに。

酒と悪魔 完

2010・11・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3239r/>

酒と悪魔

2011年3月2日23時10分発行